

瀧川資言と西村天囚

―西村家資料を用いた一考察―

池田 光子

はじめに

「日本漢学の命脈をつないだものは、まさに「古典講習科」出身の学者たちであった。」これは、町田三郎が「東京大学『古典講習科』の人々」の中で述べていた言葉である（注¹）。

東京大学が創設されたのは明治一〇年。和漢文学科も設置されていたが、洋学偏重の気風もあり、英語を中心とする諸外国語の習得が重視され、学科名にある「和漢学」は軽視されていたのが実状だった。その事に危機感を募らせた教授陣の意見によつて、「古典講習科」が同一五年に新設された。当初は国学のみが対象であったが（後に国学は「甲部」と称され、明治一七年には「国書課」と改称）、漢文学の必要性も説かれ、翌年に「乙部（後に「漢書課」と改称）」として設立された。しかし、その設置期間は六年と短く、結局は明治二〇年と二十一年の二回卒業生を送り出すに留まった（注²）。なお、卒業生総数八八名中、漢書課卒業生数は計四四名である。決して多

い人数ではないが、中途退学者も含め、漢書課は後世に名を残した者を多数輩出した。

本稿は、その漢書課に在籍していた瀧川資言と西村天囚とに注目し、両者に関連する新出資料を手がかりに、近代初期における学術交流の一端を考察したものである。

一 天囚と資言

第一節 西村天囚

本稿で取り上げる新出資料は、近年その存在が明らかとなった西村天囚関連資料群の中から見つかった。その経緯を説明するためにも、まずは天囚から紹介する（注³）。

西村天囚（一八六五（慶応元）～一九二四（大正一三））、名は時彦^{ときひこ}、字は子駿、号は天囚・碩園（注⁴）。大隈国種子島西之表（現在の鹿児島県西之表市）に生まれる。郷儒の前田豊山（一八三一（天保二）～一九一三（大

正二)に学び、明治二三年、学を志して上京。東京に出た天囚が頼った先は、父や豊山と親交のあった重野安繹(一八二七(文政一〇)〜一九一〇(明治四三))である。重野は我が子のように天囚を可愛がり、昌平黌の碩学と称されていた島田篁村(一八三八(天保九)〜一八九八(明治三一))を紹介。そして天囚は、島田の塾・双桂精舎で学ぶようになる。明治一六年、東京大学古典講習科の試験を受け、官費生として合格。しかし、先述の通り、残念ながら古典講習科は早々に幕を下ろしてしまう。明治二〇年、官費制度が廃止されたことを受け、中途退学。文筆活動で資金を得つつ、自由気ままな放浪生活を送っていたが、滋賀県知事の中井桜洲(一八三九(天保九)〜一八九四(明治二七))の招きで、中井が発刊している「さゝ浪新聞」に雇用され、新聞に関するほぼ全てを一任された。明治二二年には、大阪朝日新聞社に就職。『大阪公論』の記者を経て「大阪朝日」の編集局長となり、明治二九年に「東京朝日」の主筆となる。紆余曲折ありながらも三〇年勤続者として大正八年一月に表彰を受け、同年一二月に退社。なお、翌年には、文学博士の学位が授与されている。このことから分かるように、天囚は新聞記者としてだけでなく、漢学者としても活躍していた。その業績の中でも本稿で注目したいのは、懷徳堂顕彰運動についてである。

懷徳堂とは、近世大阪にあった官許学問所懷徳堂(一七二四(享保九)〜一八六九(明治二))のことである。明治二年に閉校となるが、懷徳堂の歴代学主を輩出した中井家の子孫である中井木菟麻呂(一八五五(安政二)〜一九四三(昭和一八))の懸命な働きかけにより、明治の後半より顕彰・復興運動が興る。本格的に動き始めたのは、木菟麻呂が懷徳堂の顕彰・復興運動について重野安繹(前掲)に相談した際に、天囚を紹介されてからである。天囚は様々な場所で懷徳堂を宣伝し、明治四三年九月には、懷徳

堂記念祭を挙げるための組織として、懷徳堂記念会を発足した(注5)。これが、現在の一般財団法人懷徳堂記念会の源流である。記念祭執行時点ではまだ法人化されていないが、記念祭挙行後、余剰金六〇〇〇円余りを基に財団の法人化が決議され、大正二年(一九一三)に文部大臣より認可を受けて法人組織となる(注6)。その事業を行う場として、大正五年には新たな懷徳堂(重建懷徳堂)が竣工された(注7)。残念ながら、昭和二〇年(一九四五)の大阪大空襲によって、重建懷徳堂の本堂は焼失してしまうが、会は存続し、コンクリート製の書庫で戦火を免れた所蔵品は大阪大学に一括寄贈、事業は大阪大学と連携しつつ運営し、現在に至っている。

天囚は朝日新聞社退職後、『楚辞』・『尚書』研究に取り組みつつ、島津家臨時編輯所編纂長や大東文化学院の講師を務めるといふ多忙な日々を過ごしていた。しかし、懷徳堂記念会の事業には積極的に関与しており、大阪に居を構え、重建懷徳堂の講師も務めていた。天囚の懷徳堂への思い入れは深く、「その余生は懷徳堂に総べてをかけ、大阪市民の学徳養成に献身する念願」であった(注8)。しかし、再三申し入れのあった宮内庁御用掛の任を拒みきれず、大正一〇年に東京へと移る。だが、わずか三年後の大正一三年七月二九日、逝去。同年七月三〇日の東京朝日の朝刊第七面には、天囚の写真と死亡記事、そして生前の業績をたたえる記事が、二段にわたって報道された。

懷徳堂記念会でも、懷徳堂堂友会が発行する雑誌『懷徳』の第二号で、『碩園先生追悼録』(以下、『追悼録』と略称)と題した追悼録が編まれた(注9)。雑誌としてはかなりの大部であり、天囚の経歴や各界からの追悼文のほか、講演記録、著述目録(『碩園先生著述目録』)、天囚が収集した『楚辞』関連書籍の書目一覧などが掲載されている(注10)。なお、天囚の蔵書は「碩園文庫」と名付けられ、大正一四年に「故西村博士記念会」を通じて重建懷

徳堂に寄贈された(注11)。その報告に「昨年故西村博士記念会より碩園記念文庫の名を以て同博士旧蔵書全部の寄贈があり(傍点は筆者による)」(注12)とあるため、近年に至るまで、全ての天囚旧蔵書は、重建徳徳堂の蔵書を受け継いだ大阪大学附属図書館の徳徳堂文庫にあると考えられている。しかし、先述の『追悼録』に記載されている「碩園先生著述目録」と一致しない資料が多々有り、「全部」と言う報告には、一部の研究者から疑問が持たれていた。

その疑問を解決するための糸口となる出来事が、平成二九年に起きる。天囚の後裔であり、種子島にご在住の西村貞則様・久美様と御息女の矢田睦美様が大阪大学に來訪され、種子島の西村家に多数の天囚関連資料が保管されていることが明らかになったのである。この発見はメディアを賑わせ、新聞やインターネットで紹介された(注13)。そして、西村氏の訪問を受けた大阪大学の湯浅邦弘教授を中心にチームが生まれ、同年に第一回目の調査が行われた(注14)。これらの資料群は「(種子島)西村家所蔵西村天囚関係資料」(以下、西村家資料と略称)と仮称され、コロナ禍を挟みつつ、現在も定期的に調査が行われている。

なお、現時点までに西村家資料の暫定目録は二種発表されている(注15)。それを承け、「碩園先生著述目録」と徳徳堂文庫所蔵の碩園文庫との関係性について検討がなされ、先述の「全部」に関する疑問が解明された(注16)。また、西村家資料は多数の新出資料を含んでいるため、それらを用いて、従来よりも鮮明な天囚の学術交流や朝日新聞社時代の活躍の様子なども発表されている(注17)。

このように、西村家資料は、天囚を軸とした近代初期の知的交流の様相について、新たな情報を与えてくれる貴重な資料群である。本稿では、その資料群の中でも「扱善居記」を取り上げる。「扱善居記」は西村家資料で

あるが、抄者は天囚ではなく、『史記会註考証』で著名な瀧川資言である。本資料が、何故西村家資料の中にあるのかを検討するためにも、次節では資言について確認しておく。

第二節 瀧川資言

瀧川資言(一八六五(慶応元)〜一九四六(昭和二十一年))、戸籍名は龜太郎、字は子信・資言、号は君山。島根郡内中原(現在の島根県松江市内中原町)に生まれる。父は藩士瀧川奎之丞、母カネも士族の家の長女であった。資言ははじめ、瀧川家の菩提寺である桐岳寺の私塾で学び(注18)、小学校に上がると(明治六年)、藩儒雨森精齋(一八二二(文政五)〜一八八二(明治一五))や内村鱸香(一八二二(文政四)〜一九〇一(明治三四))に師事した。松江中学校では、若槻礼次郎(一八六六(慶応二)〜一九四九(昭和二四))と首位を競ったと言う(注19)。なお、この頃から資言の文才は周囲に知られており、中学校の開業式(始業式)に朗読するはずだった祝辞は(注20)、当時より名文の誉れ高かったと伝えられている(注21)。ちなみに詩は好まなかったと言う(注22)。

明治一五年三月、資言は中学校を中退し、東京に遊学する。父奎之丞の出国届けには「学業修行の為」と書かれていたらしい。この中退の件について、水澤利忠は金銭面の問題ではないとし、資言が父に宛てた次の書簡を紹介している(注23)。

中学校一科ニテさしたる人物も無御座候得共、二科の方にも無御座候。且、二科にてハ洋学一方にて、漢学は二ノ手ニ有之、今之所ハ一時ヨリ無御座候。当今ハ洋学トモ学ハサル可カラサル事ニ御座候得共、未タ甚タ隆学ナラス。漢学ヲ二ノ手ニいたし候てハ、猶ほ

彼ノ事ヲ知リテ我レノ事ヲ知ラサル如ク、其ノ上洋学ハ誰もいまた致サ、ル事故、小児ノ五十音ニ於ケル如ク、実ニ六ヶ敷由、二科生奥村礼之話ニ候。

資言は恰も老書生のような態度で、中学校の物足りなさや洋学を中心とする新教育への不満、そして漢学の重要性を述べている。水澤は、このような当時の趨勢に逆行する資言の性行が誕生したのは、父奎之丞の漢学を重視した庭訓に基づくのではないかと推測し、だからこそ、漢学修練のためには中学校を中退し、上京することを奎之丞は許可したのであろうと指摘している。

上京した資言は、島田の双桂精舎に入る。次いで東京大学古典講習科に入学し、明治二〇年に卒業。翌年に法制局雇となり、同二六年には時の文部大臣井上毅（一八四三（天保一四）〜一八九五（明治二八））に文才を認められて大臣官房秘書課に出仕、翌年には図書課も兼任したことで、教科書を含む様々な文書の審議に当たった。青山学院の講師を経て同三〇年に第二高等学校（現在の東北大学）の教授に任ぜられ、大正一四年に還暦で辞するまでの三〇年間を勤める。その後は、同一五年から昭和三年の間、大東文化学院の教授も務めた。その間に父奎之丞が亡くなり（昭和二年）、家督を継いだ資言は、昭和五年に甥の亮を養子として迎え、郷里の松江に帰る（注24）。同六年、『史記会註考証』の一部を東北大学に提出し、文学博士の学位を受ける。そして同九年に東京に居を移し、翌年から再度大東文化学院の教授となるも、戦火を避けて同二〇年に松江に疎開。翌年二月、逝去（注25）。

資言の三〇回忌となる昭和五〇年、「瀧川君山先生故居碑」が、松江での住まいであった塩見縄手の武家屋敷（旧瀧川家）に建てられた。その碑文

にも記されているとおり、資言の代表的な著作と言えは『史記会註考証』である（注26）。資言がこの大著に着手した切っ掛けは、同書の跋文「書史記会註考証後」によると、大正二年に東北大学で「史記正義」の逸文が記された書入本を発見したことによる（注27）。そして、「学校から帰宅すれば、服を脱ぎ捨て直ちに書齋に入り、山なす書籍に埋って黙々編纂に没頭」し、「眼薬をさしながら、来る日も来る年も倦まずに研究を続けた結果、漸く原稿が完成（注28）。昭和七年から九年にかけて、東方文化学院・東京研究所から刊行されることとなり、「昭和の大出版の一」と評された（注29）。だが、これはあくまで後世の評であり、出版直後は、部数が五〇〇部という限定的なものであったこともあつてか、反応は芳しいものではなかった。また、中国では相当の反響があつたものの、批判的なものが多かつたという（注30）。しかし、司馬遷の生誕二一〇〇年（昭和三〇年）を記念して、モスクワで旧ソ連を挙げての祝賀会が開かれた際、中国では記念事業の一環として『史記会註考証』が復刻された。これを機に『史記会註考証』は続々と復刻刊行され、日本に逆輸入されるほどになった。

第三節 天因と資言

以上、天因と資言とを紹介したが、その経歴から明らかなように、両者は近代初期を代表する漢学者である。鹿兒島と島根という離れた場所で誕生した二人だが、その付き合いは古く、一〇代半ばの双桂精舎時代に始まる。その時のエピソードが、『追悼録』に寄せられた資言の追悼文、「碩園博士の初年と晩年」（以下、「初年と晩年」と略称）に見える。

明治十五年春、余始めて東遊し篁村先生の双桂精舎に入る。重野先生の塾生なりとて講席に列せし一書生あり、身の長け五尺八九寸時

時塾舎に來り好みて文章を談す。その言娓娓聽くべし。一日同舎生郷里より碑文の起草を頼まれたれども、先生に願ふも畏多ければ誰人か筆を執るものぞといふ。彼の身長の一書生我作らんと数日ならずして作り來る。布置齊整文字簡鍊、自ら大家の規模あり。余一読驚異その郷里と姓名を問ふに、種子島の産西村時彦と答ふ。これ余が碩園博士を識りし初めなり。

前節で挙げた父李之丞に宛てた書簡の中で、中学校への物足りなさ、そして洋学重視の風潮が、漢学を重視する自身の学問と乖離していることを不満として述べていた資言にとって、文章について共に語り合うことができるところに、数日で見事な碑文を作成してしまう天囚の存在は、自身と重なるところがあり、魅力的な存在に映ったであろう。また、漢学を重視する学問姿勢も、両者に共通していた(注31)。資言については、前掲の父宛の書簡で触れた通りだが、天囚についても左の文章から窺える(原文への句読点及び書き下し文は筆者による)。

維新以降、取長補短之説起、自教学兵刑以至技芸之末、一切崇尚西法。是固可也。然推波助瀾、往而不反。暨於明治十五六年之交、海内靡然模倣洋風、抵排旧俗、国典漢書、猶且棄而不講、將併取彼之短而又舍我之長。其弊有不勝言者焉。

(維新以降、長を取り短を補うの説起こり、教学兵刑より以て技芸之末に至るまで、一切西法を崇尚す。是れ固より可なり。然して推波助瀾、往きて反らず。明治十五六年の交に暨り、海内靡然として洋風を模倣し、旧俗を抵排し、国典漢書、なお且に棄てて講ぜざるは、將に彼の短を併取して又我の長を舍つ。その弊言うに勝えざる

ものあり。(「古典科師友寿讌記」(注32))

なお、「初年と晩年」には、共に古典講習科の試験を通過した話や、天囚が火事で下宿を失った時に部屋を貸したこと、資言が受け取る予定であった原稿料を天囚が「餞別」として持ち去ってしまった話なども綴られており、学問を離れた所においても両者が親しい間柄であったことを伝えている。

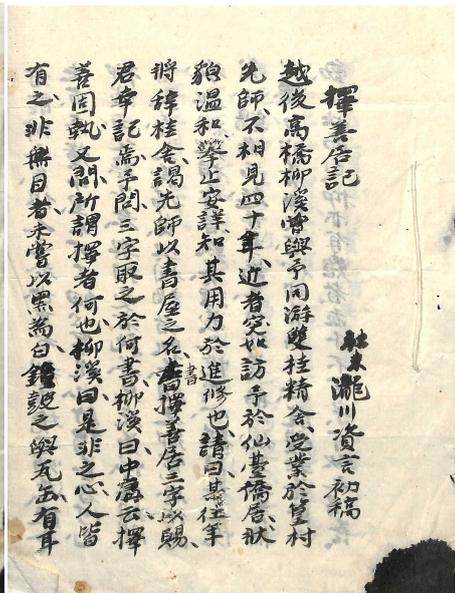
以上のように、通底する学問姿勢や親交の深さが窺える両者だが、その学術的交流について論じた先行研究は、管見の限りに於いて無い。「初年と晩年」には、親交の深さを示すエピソードだけではなく、天囚が漢詩文の鍛錬のために結成した会である景社の件や(注33)、章句考拠を重視するようになった理由、当時の漢学に対する持論、『楚辞』研究に関する内容などが記された天囚からの書簡も紹介されており、両者の間に学術的交流があったことはほぼ確実である。しかし、等閑視されてしまっているのは、「初年と晩年」以外に、具体的に両者の学術的交流を示すような資料が無かったためであろう。

本稿で取り上げる「扱善居記」は、その状況に一石を投じる資料である。添え状はないが、おそらく資言が天囚に批正を求めて送ったものである。次章で詳しく紹介したい。

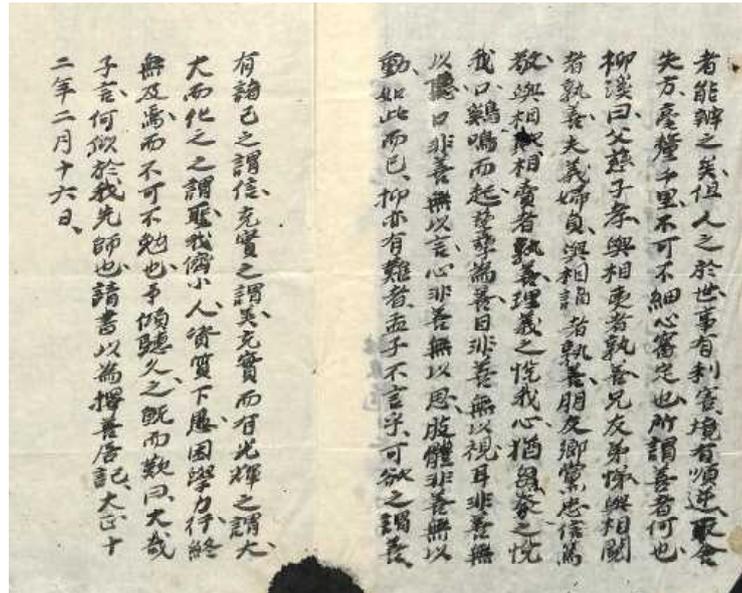
二 「扱善居記」に見る学術交流図

西村家資料蔵「扱善居記」は、二葉仮綴じの抄本である(図1・2)。本文は、一葉半にわたって墨筆で記されている。大きさは、縦二四・八cm×横一七・〇cm、全文は次のとおり(原文には区切りを示す読点が付されて

いるが、書き下しに合わせ一部改めた。また、鉤括弧・傍点線・書き下し文は筆者による。



(図1)「拙善居記」1葉表



(図2)「拙善居記」1葉裏～表2葉

拙善居記 社東瀧川資言初稿

越後高橋柳溪、嘗与予同游双桂精舍、受業於篁村先師。不相見四十年、近者突如訪予於仙台僑居、状貌温和、举止安詳、知其用力於進修也。請曰、「某往年将辞桂舍、謁先師以書屋之名、書「拙善居」三字以賜。」君幸記焉。予問、「三字取之於何書。」柳溪曰、「『中庸』云、「拙善固執」(注34)。」又問、「所謂「拙」者何也。」柳溪曰、「是非之心、人皆有之。非無目者、未嘗以黒為白、鐘鼓之与瓦缶(注35)、有耳者能弁之矣。但人之於世、事有利害、境有順逆。取舍先方、毫釐千里、不可不細心審定也。」所謂「善」者何也。」柳溪曰、「父慈子孝与相夷者孰善。兄弟悌、与相鬩者孰善。夫義婦貞与相謫者孰善。朋友郷党、忠信篤敬与相欺、相売者孰善。理義之悦我心、猶芻豢之悦我口(注36)。鷄鳴而起、孳孳為善(注37)、目非善無以視、耳非善無以聽、口非善無以言、心非善無以思、肢体非善無以動。如此而已。抑亦有難者、孟子不言乎。可欲之謂善、有諸己之謂信、充實之謂美、充實而有光輝之謂大、大而化之之謂聖(注38)。我儕小人、資質下愚、困学力行、終無及焉。而不可不勉也。」予傾聽久之、既而歎曰、「大哉子言、何似於我先師也。」請書以為拙善居記。大正十二年二月十六日

(越後の高橋柳溪は、嘗て予と同一に双桂精舍に遊び、業を篁村先師に受く。相見えざること四十年、近者突如我を仙台の僑居に訪ぬ。状貌温和にして、举止安詳、其れ力を進修に用うるを知る。請いて曰く、「某往年将に桂舍を辞さんとするに、先師に謁え書屋の名を以て、「拙善居」の三字を書し以て賜う。」と。君幸う焉を記すを。予問う、「三字之を何の書より取るか。」と。柳溪曰く、「『中庸』云えらく、「拙善固執(善を拙び固く執る)」と。」又問う、「所謂「拙」

とは何ぞや」と。柳溪曰く、「是非の心、人皆之有り。目無き者に非ざれば、未だ嘗て黒を以て白と為さず。鐘鼓と瓦缶と、耳有る者は能く之を弁ず。但し人の世、事に利害有り、境に順逆有り。取舍方を先にし、毫釐千里、細心審定せざるべからざるなり」と。「所謂「善」とは何ぞや」と。柳溪曰く、「父慈子孝と、相夷す者と孰れか善。兄友弟悌と相闕ぐ者と孰れか善。夫義婦貞と相謫むる者と孰れか善。朋友郷党、忠信篤敬と相欺き、相売る者と孰れか善。理義の我が心を悦ばするは、猶お芻豢の我が口を悦ばするがごとし。鶏鳴きて起き、孳孳として善を為し、目は善に非ざれば、以て視る無く、耳は善に非ざれば、以て聴く無く、口は善に非ざれば、以て言う無く、心は善に非ざれば、以て思う無く、肢体は善に非ざれば、以て動くこと無し。此くの如きのみ。抑も亦難しき者有るは、孟子言わず。欲すべき之を善と謂い、諸れの己に有るを之信と謂い、充実せるを之美と謂い、充実して光輝有るを之大と謂い、大にして之を化するを之聖と謂う。我儕は小人にして、資質下愚、困学力行するも、終に焉に及ぶ無し。而れども、勉めざるべからず。」と。予久しく之を傾聴するも、既にして歎じて曰く、「大いなるかな子の言、何ぞ我が先師に似たらんや。」と。請いて書し以て「扞善居記」を為す。大正十二年二月十六日)

島田の双桂精舎で共に学んだ高橋柳溪と言う人物が、四〇年ぶりに資言を訪ねてきた事から話が始まっている。大要は以下のとおり。久しぶりに会った柳溪は温和な容貌で、立ち居振る舞いも厳かであり、進修に努めたことが窺えた。柳溪は、その昔、双桂精舎を辞して郷里に帰ろうとする際、島田より書斎の号に「扞善居」の三文字を貰ったのだが、その記を資言に

書いて欲しいと頼んできた。そこで、資言は「扞」「善」について柳溪と問答を交わす。『孟子』の万人大同論と性善説を用い、島田の教えを会得したかのような見事な柳溪の回答に感歎した資言は、求めに応じてこの「扞善居記」を書いた。

注目したのは、一行目の署名の下にある「初稿」の文字である。態々初稿を天囚に送ったと言う事は、天囚の意見を求めていたと解釈して良いであろう。前章で確認した両者の間柄を考えると、そのようなやり取りがあるのは、当然とも言える。だが、本資料が西村家に伝存していると言う事は、天囚は資言の求めに応じなかったと言うことだろうか。

その答えとなるのが、『斯文』第五編第六号(斯文会、大正一二年一月)の「文苑」に掲載された「扞善居記」である。左にその全文を挙げる(原文には区切りを示す読点と返り点とが付されているが、一部改めた。なお、句読点・鈎括弧・傍点線は、筆者による)。

扞善居記 君山瀧川資言

越後高橋柳涯(注39)、曾与予同游双桂精舎、受業於篁村先師。嗣後不相見四十年、近者来訪予於仙台僑居。状貌温和、举止安詳、知其用力於進修也。請曰、「某往年将帰郷、謁先師以書屋之名、書「扞善居」三字以賜。蓋取諸『中庸』也。」君幸作之記。予問、「所謂「扞」者何也。」柳涯曰、「是非之心、人皆有之。非無目者、未嘗以黒為白。但事有利害、境有順逆。取舍先方、毫釐千里、不可不審思而明弁也。」所謂「善」者何也。」柳涯曰、「父慈子孝与相夷者孰善。兄友弟悌与相闕者孰善。夫義婦貞与相謫者孰善。朋友郷党、忠信篤敬与相欺相争者孰善。理義之悦我心、猶芻豢之悦我口。鶏鳴而起、非善無視也、非善無聴也、非善無言也、非善無思無動也。抑亦有難者、孟子

不言乎。可欲之謂善、有諸己之謂信、充美之謂美、充實而有光輝之謂大、大而化之之謂聖。我儕小人、資質下愚、困学力行、終無能及焉。而不可不勉也。」予聞而歎曰、「大哉子言、何其似於先師也。」請書以為記。大正十二年二月

西村碩園曰、「用意親切、自是儒者之言。」

安井朴堂曰、「雕琢帰樸」(注40)、古人不吾欺。」

牧野藻洲曰、「筆用問答、自『公羊』來。」又曰、「朋友切磨、竟歸美于先師。仁人之言霽如也。」

日下勺水曰、「簡練老成、所謂「絢爛之極、帰平澹」(注41)者。」

(越後高橋柳涯、曾て予と同に双桂精舎に遊び、業を篁村先師に受く。嗣後相見えざること四十年、近者予を仙台の僑居に來訪す。状貌温和にして、举止安詳、其れ力を進修に用うるを知るなり。請いて曰く、「某往年將に郷に帰らんとするに、先師に謁え書屋の名を以て、「扱善居」の三字を書し以て賜う。蓋し諸れ『中庸』より取るなり。」と。君幸う之が記を作るを。予問う、「所謂「扱」とは何ぞや。」と。柳涯曰く、「是非の心、人皆之有り。目無き者に非ざれば、未だ嘗て黒を以て白と為さず。但し事に利害有り、境に順逆有り。取舍は方を先にし、毫釐千里、審思明弁せざるべからざるなり。」と。「所謂「善」とは何ぞや。」柳涯曰、「父慈子孝と相夷す者と孰れか善。兄弟悌と相闕ぐ者と孰れか善。夫義婦貞と相諳める者と孰れか善。朋友郷党、忠信篤敬と相欺き相争う者と孰れか善。理義の我が心を悦ばするは、猶お芻豢の我が口を悦ばすがごとし。鶏鳴きて起き、善に非ざれば視る無く、善に非ざれば聴く無く、善に非ざれば言う無く、善に非ざれば思う無く動くこと無きなり。抑も亦難しき者有るは、孟子言わず。欲すべき之を善と謂い、諸れの己に有す

るを之信と謂い、充実せるを之美と謂い、充実して光輝有るを之大と謂い、大にして之を化するを之聖と謂う。我儕は小人にして、資質下愚、困学力行するも、終に能く及ぶ無し。而れども勉めざるべからざるなり。」と。予聞きて歎じて曰く、「大いなるかな子の言、何ぞ其れ先師に似たるや。」と。請いて書し以て記を為す。大正十二年二月

西村碩園曰く、「用意親切、自ずからは是れ儒者の言なり。」と。

安井朴堂曰く、「雕琢して樸に帰る」、古人吾を欺かず。」と。

牧野藻洲曰く、「筆するに問答を用うるは、『公羊』より来る。」と。又曰く「朋友切磨し、竟に美しきを先師に帰す。仁人の言霽如たるなり。」と。

日下勺水曰く、「簡練老成、所謂「絢爛の極み、平澹に帰する」者なり。」と。

おそらくは、これが「扱善居記」の完成版であろう。初稿の時点からタイトルに変更は無く、字句の異同はあるが大要に大きな変動はない。明らかに異なるのは、本文の後に西村碩園「天囚」・安井朴堂「小太郎」(一八五八(安政五)〜一九三八(昭和二三))・牧野藻洲「謙次郎」(一八六三(文久二)〜一九三七(昭和一二))・日下勺水「寛」(一八五二(嘉永五)〜一九二六(大正一五))の概評が付いている点である。

当時の漢学者は、文章を作成すると師友に回覧して批評を求め、文を練る風潮があった(注42)。「扱善居記」は短い漢文だが、傍点線部を対照するだけでも、字句の異同が散見され、初稿よりも簡潔でテンポの良い漢文へと変容しているのが看取できる。これらの事と初稿が天囚に送られたこと、また、その天囚が概評を付していることを勘案すると、資言は概評の四名

に批正を乞い、得られた意見を基に稿を改め、最終的に四名からの評を得て、『斯文』に投稿したと考えて良いであろう。つまり、天囚は初稿の返却はしなかったが、資言の求めに応じなかったわけではなく、別の方法で意見を伝えていたと考えられる。逆に言えば、『斯文』の「拙善居記」のみでは、『斯文』に投稿された資言の作品に対し、発行元である斯文会の常議員を務めていた天囚が評を付したとしか思われぬが、本資料の発見によって、初稿の段階から意見交換が行われていたことが明らかになり、両者の間に学術的交流があったことが確認できた。

ここで気になるのが、天囚以外に評を付していた安井・牧野・日下と資言との関係性である。天囚との親交の深さは前章で確認しているため、初稿を送って批正を乞い、評を付すような間柄であるのも分かる。同様の関係性が安井・牧野・日下との間にもあったのか、当時の知的交流図を窺うためにも、確認しておく。

先述のとおり、『斯文』の「拙善居記」は、「文苑」の欄に掲載されている。「文苑」には資言のほか、四名の文章が掲載されているが(注43)、全てに評が付されているわけではない。また、評があるものについても、「拙善居記」と同じ顔ぶれではない。このことから、斯文会職員が投稿作品に評を付していた訳ではないことが分かる。そもそも、安井は会幹の庶務、牧野は常議員を務めていたものの、日下は斯文会職員ではない(注44)。では、資言が個人的に各々に依頼したのであるか。確かに、安井は双桂精舎や東京大学古典講習科、牧野は大東文化学院、日下は重野を通じた繋がりがあつたため、それは可能である。しかし、本資料のような短文且つ重要性が高いとは決して言えない内容の漢文の批正を、態々このような錚々たる顔ぶれに乞うだろうか。加えて、何故この三名なのかと言う疑問も生じる。そこで、この三名と資言との共通点を調査したところ、一つの結社の存在

が明らかになった。それが「以文会」である。以文会は、詩文の振作を目的に、毎週土曜日開催されていた会である。以文会については、『斯文』第一編第一号(斯文会、大正八年二月)の彙報欄に会の紹介と当時の会員一覧とが掲載されている。(注45)。会員の中に天囚の名は見当たらないが、資言を含む四名の名前は確認できる。つまり、「拙善居記」は、資言が以文会に批評を求めて提出した作品である可能性は高い。そして会とは別に、斯文会の常議員であり、親交のあつた天囚にも意見を求めたのであろう。

残念ながら以文会の活動は、先程挙げた『斯文』第一編第一号の情報以外、現時点では手がかりがなく、詳細な活動内容は不明である。しかし、以文会の活動と関連が無かつたとしても、「拙善居記」は、資言を軸とした当時の漢学者たちの知的交流を窺うことができる貴重な資料と言えよう。

三 資言の詩文と教育

前章では、新出資料「拙善居記」を用いて、天囚と資言との間に具体的な学術交流があつたことを明らかにすると共に、同資料から読み取れる他の漢学者との交流についても指摘した。それを踏まえた上で、本章では、資言に関して新たな視座から検討する必要性があることを提示したい。

一章で述べた通り、資言の代表的な著作として、まず挙げられるのは『史記会註考証』である。よって、資言に関する研究の殆どは、『史記会註考証』について論じたものである。資言は当時を代表する漢学者であるため、その学問的特徴や学術交流について明らかにすることは、近代初期の知の交流図とその様相を明らかにすることに繋がる。しかし、『史記会註考証』のみからこれらを窺うには限界がある。前章で「拙善居記」を用いてその一端を明らかにしたように、今後、資言を対象とした研究を行う際には、『史

記会註考証』以外の資料についても検討すべきと言えよう。そこで、『史記会註考証』から離れて資言の新たな学問姿勢を明らかにした研究として、本章では二点の先行研究を紹介したい。一点目が、池澤一郎「大須賀筠軒と瀧川君山との交遊―忘れられた日本近代文学―」（注46）である。

大須賀筠軒（一八四一（天保一二）～一九一二（大正元））は、詩文・書画をよくした人物である。資言とは、第二高等学校で同僚として出会い、交流が始まった。池澤は、資言の筠軒宛書簡を読み解くことで、両者がそれぞれ専門とする文学者・歴史学者としての学識だけではなく、経史子集の知識が通底していたことの確認を目的に論を展開している。その中で、資言が詩学へも造詣が深かったことについて論じており、「瀧川も詩学に深く、かつ作詩の心得があったということは、筠軒の連作三十首の韻目が去声の三十韻を去声一送韻から去声三十陥韻をすべて列挙していることをさりげなく指摘することに充分に示されている」と述べ、資言が詩学について一家言を持っていたと指摘している（注47）。

池澤のこの指摘は大変興味深い。何故なら、一章でも記したとおり、従来、資言は詩を好まなかったと評されているためである。なお、資言自身も詩について、大正一三年の講演の中で、次のように述べている（傍線は筆者による）。

詩の事について考えて見ます。文章を作る人は詩が下手でいらせられしました。私の亡父の話では、先生（筆者注…雨森精齋を指す）は詩を直す事が非常に早いとの事でありました。それは亡父が勤めて居りました際、仲間同志或は若殿様たちと一緒に作って先生に直して貰うに十首、二十首位まであったようですが、先生は待つて居れという様な具合で直ぐ筆をとってお直しになる。真に迅速なもので

あり、話し乍らお直しなさったがそれが一々肯綮に中って居ったと云う様な事を承つて居ります。先生の御詩作を拝見致しますと、古詩、近体、五言、七言、種々ございしますが、私は實際詩を作りませんから、無論解りませんけれども、先生は御上手な中に二十字の長城とも申上ぐべきか（注48）。

詩を好まなかったと言う後世の評は、おそらく傍線部の言葉に基づくものであろう。また、資言自作の漢詩はほぼ無いことも（注49）、評に大きな影響を与えていたと思われる。だが、池澤が挙げていた韻を指摘する資言の言葉からは、詩に対する学識の深さと興味関心の高さが窺える。このことを踏まえ、改めて傍線部の言葉を考えると、「詩を作りませんから、無論解りません」と述べたのは、詩への造詣が深いからこそ、納得出来るような詩が作れない自分を謙遜したためと捉えた方が自然であろう。つまり、詩を好まなかった、と言う後世の評に繋がったこの発言は、寧ろ資言の詩への造詣の深さを示したものであり、池澤が目的とする「経史子集を貫く鬱然たる学識を備えた人物」であることを確認できる発言と言えよう。

二点目が、教科書検定を通じた木村淳の研究である（注50）。木村は、明治期の漢文教科書編集、漢文教材選択の可否を判断した検定者に漢学者が多く携わっていたことに注目し、教育分野における漢学者の活躍と、漢文教材の変遷に果たした役割について論及している。

一章で紹介した通り、資言は、文部省大臣官房秘書課と図書課とを兼任した明治二七年から翌年八月まで教科書調査の囑託を受け、中学校用漢文教科書の検定に携わった。木村はその点に着目し、「（資言は）『史記会註考証』一〇冊で知られるが、漢文教育史においては高等学校や中学校用の教科書を編集していることも注目してよいだろう」と述べ、資言の出した修

正意見を数点示し、当時の検定制度は本来統制を強化するという意図があったが、資言はそのような意図とは無関係に、教材や訓点が適切か否かという漢文教授を重視して選定していたことが窺えると指摘している。また、このような資言の姿勢が、「近代的な漢文教科書の発展に関わり、軽視できない足跡を残した」とも評している。

木村の研究は、資言の漢文教育観だけではなく、漢文論をも読み取ることででき、資言の学問姿勢を検討する上で重要である。例えば、木村の挙げている修正意見の資料の内、署名はないものの、資言も検定を担当した書籍への修正意見として左のものがある（傍線は筆者による）。

此篇載スル所ノ文、スヘテ百余篇而して、服部元喬・菅亨^{かんあきら}ノ文ヲ収ムルコト実ニ三十三篇ノ多キニ居ル。皆文字拙劣ニシテ、漢文ノ模範トスヘカラス。殊ニ服部ノ文ハ、所謂李王古文辞ノ体ニシテ、決シテ漢文ノ正体トイフベカラズ。又藤原肅・伊藤維楨^{これさだ}ノ文ノ如キモ皆未タ和習ヲ脱セサルモノ、而シテ本書之ヲ収ムルコト亦若干篇ナリ。

これが資言の意見であるかは定かではないが、この意見が提出された書籍が教科書として認可されなかったことから、この考え方が資言も含めた検定者間で、共通認識であったことは間違いない。

資言の考える「漢文ノ正体」や「和習」のしない漢文が、具体的にどのような漢文を指すか現時点では不明だが、これが明らかになれば、資言だけではなく、当時の漢学者たちが目指していた「漢文ノ正体」が描出されることにも繋がると考えられる。今後の検討課題の一つとしたい。

以上、先行研究を二点紹介したが、いずれも『史記会註考証』以外の視

座から資言の学問について新たな提言をしており、今後の資言研究、または近代初期の漢学者研究を進めていく上で、一考すべき内容である。このように、近代初期の学問の様相は未だ充分に明らかにされておらず、検討の余地が残されている。

おわりに

本稿では、西村天囚と瀧川資言とに関する新出資料を手がかりに、両者を中心とした近代初期における学術的交流の一端を明らかにした。併せて、資言の学問姿勢を検討する上で、今後は新たな視座が必要であることを先行研究を紹介しつつ指摘し、近代初期の知の様相には検討の余地が残されていることを示した。

さて、最後に「択善居記」以外の天囚と資言とに関連する新出資料を二点紹介したい。一点目は、二松学舎大学が収集した資料である。

天囚と資言、共に親交の深かった人物に、市村瓊次郎^{きんじろう}（一八六四（元治元）～一九四七（昭和二二））が居る。市村は東洋史の学者として著名な人物だが、漢文教育や漢詩などについても数多くの業績を残し、維新後の漢学を立て直した一人と称されている。三名の交流は古典講習科に始まり、その親交の深さは、風体に物申すほどであった。

昨冬、瀧川子信（筆者注…資言）にすゝめて鬚髯を剪れと申遣候処、未練有之と相見申候。老境ハ若々しきかよろし。我兄（筆者注…市村）ノ髯も白き也、可剪去也（注51）。

右は、天囚が市村に送った書簡の一部である。天囚は資言のトレードマ

ークとも言える見事な髭を剃れと言うだけで無く、まだ剃っていないことに不満を示し、しかも市村にまで髭を剃るようにと告げている(注52)。このような忌憚の無い意見が言い合えるのは、学術面でも同様であったようである。市村が提出した大学の課題の中には、教官からの評だけではなく、同級生達からの意見も書き込まれているものがあるが、同級生の内、批評をもつとも書き込んでいるのが天囚と資言であると言う(注53)。

さて、先程紹介した髭の話の直前には、斯文会と懷徳堂とに触れた次の記述がある。

斯文学会御刷新御計画、賛成に御座候。鄙名御加之事、毛頭異存無之、将来ハ懷徳堂と呼応して実効を期し度ものと存候。

天囚は、斯文会設立について賛成し、会員として名を連ねる事を承諾した後、将来的には斯文会と懷徳堂とが呼応して漢学振興を行っていききたいと述べている。斯文会と懷徳堂記念会との連携事業が実現したのか現時点では不明だが、一定の規模を誇る東西の漢学拠点繋がろうとしていた形跡が見られるのは注目すべきである。このように、「日本漢学の命脈をつないだ」人々の繋がりを蓄積していくことで、最終的には近代初期の知のネットワークとその様相が明らかになると予測している。本稿での成果をもとに、他の漢学者についても今後検討していきたい。

もう一点は、「扱善居記」同様、西村家資料で発見した資料である。本資料は、資言が「初年と晩年」の中に挙げた大正九年九月七日付けの天囚書簡に関するものである。まずは、書簡の一部を左に挙げる(傍線は筆者による。また、句読点を一部追加した)。

扱家母(浅子太孺人)今年八十一に相成候に付、陰曆八月二十三日の誕辰に小宴相催度、誠に恐縮に候得共、寿言一聯を賜り度奉希候。過日岡田君格より表聯一對小包にて御送申上候筈、是に御認被下候様奉願候。東京にては小牧、市村、萩野、岡田の諸老、京阪にては狩野、内藤、鈴木(豹軒)、長尾、磯野之諸君に依頼致居候。老兄の一聯なければ、藻飾不足の感有之、是非願上候。支那ニテハ寿聯が流行ニ御座候間真似申候。序又は詩は尚更可なれとも、面働の事故御願申兼候間寿聯に致候。

母の誕生日の祝いとして、天囚が資言に寿聯の作成を依頼していたことが傍線部から読み取れる。この依頼に対して、資言がどのように応じたかまでは「初年と晩年」に書かれていない。しかし、おそらくこの依頼で作成したであろう資料が、令和四年の西村家資料調査で発見された(書き下しは筆者による)(図3)。

義方教子於歐母有光

西村太孺人榮壽 君山瀧川資言 □□(注54)



(図3) 寿聯

(義方もて子を教う於^あ欧母に光有り)

西村浅子太孺の長命を言祝ぐ 君山瀧川資言 □□

経年劣化による破損は見られるが、幸いなことに文字は損なわれることなく残っている。「義方教子」は竇燕山とうえんざんの故事を(注55)、「欧母」はそのままでも「賢母」の意味でとれるが、おそらくは夫を早くに亡くしながら欧陽脩を立派に育て上げた欧陽脩の母と天囚の母浅子との境遇を重ね合わせで用いているのである(注56)。いずれにしても、正しい規範を以て天囚を育て上げた浅子を讃えた内容であり、赤い紙が用いられていることから、書簡での求めに応じて作成された寿聯であることは間違いない。天囚と資言との友情の深さが窺える資料である。

西村家資料だけではなく、先程紹介した二松学舎大学収集資料のように、近世初期の学术交流の示す資料は、未だその存在が明らかにされないまま各地に遺されている。これらの資料が新たな、近代初期の「知」の側面を伝えてくれる可能性は高い。よって、今後も資料調査を行いつつ、近代初期の知の様相について研究を進めていきたい。

注

(1) 『哲学年報』五一(九州大学大学院人文科学研究院、平成四年三月)。町田は、林泰輔『支那上代之研究』にある井上哲次郎の序の一節を引用し、それに賛同する形でこの言葉を述べている。

(2) 古典講習科が廃止となった原因を一視点からのみ捉えることが困難であるため、以下、三氏の指摘を挙げておく。注1に挙げた論考の中で町田は「文学部附設

「古典講習科」の運営費は、大学の通常経費の外に請求したものであったが、これが認められず学内経費で支弁することとなり、当初から経済的に維持の難しい状況にあった。こうした状況の中で、「中略」全廃に至った」と経済的な背景を挙げている。また、町泉寿郎は「幕末明治期における学術・教学の形成と漢学」(『日本漢文学研究』、二松学舎大学二世紀COEプログラム、平成二八年三月)の中で明治一九年の帝国大学令を挙げ、明治日本に必要な学問が吟味された結果、帝国大学設立を契機に古典講習科は官費支給の打ち切りや学士学位の不交付などの打撃を受けたことを指摘している。齋藤希史は「漢学の岐路」(『国書』の起源 近代日本の古典編成)第二章、新曜社、令和元年九月)において、「和漢文学科は和文学科と漢文学科にわかれ、実質的な拡充を果たすことになった。時系列で見れば、古典講習科の設置、乙部(漢書課)の設置、和漢文学科の分割となり、この分割案が〔中略〕講習科の停止を前提として構想されたと推測しうる」と述べており、古典講習科の廃止について経済的な側面ではなく、和漢文学科の分割・拡充と深く関連するとの認識を示している。

(3) 天囚の経歴については、後醍醐院良正編『西村天囚伝』上巻・下巻(昭和四二年八月)に拠ったところが多い。

(4) 号について、武内義雄「先生の遺訓」(『碩園先生追悼録』(『懐徳』第二号)、懐徳堂堂友会、大正一四年二月)に、次のようにある。

先生は初め天囚と号し後に碩園と改められた。私は或る時何故に有名な天囚をすて、碩園に換へられたのか御尋ねすると、先生は笑ひながら『そこが思想の変ったところさ、吾輩も少壮の頃は血氣にかられてつまらぬ真似をしたものだ、当時は吾輩も性悪論者で人間は本来悪を働き度いものだが、天から囚られて牢屋に打ち込れて居るのだから仕方がないと思つて居た、そこで自ら天囚と号したのだが、此頃では性善論者に成つた、これが号を改めるに至つた第一の理由。それから天囚といふ文字は我より古をなしたもので、古典

に拠りどころはないと思つて居たが、後に公羊伝の疏にある事を知つた、而して公羊学は、吾輩大嫌、これが改名を促した第二の理由。この二つの理由で天囚の号が嫌になり郷里の大園村を取つて碩園と号した」と語られた。

これによるならば、碩園を用いるべきかもしれないが、本稿では広く知られている「天囚」を用いることとする。

(5) このあたりの経緯については、竹田健二『市民大学の誕生―大坂学問所懷徳堂の再興』(大阪大学出版会、平成二二年二月)に詳しい。

(6) 『懷徳堂記念会会務報告』第八章(懷徳堂記念会、大正二年一〇月)及び『懷徳堂一覽』「財団法人懷徳堂記念会趣旨」・「財団法人懷徳堂記念会寄付行為趣旨」等(財団法人懷徳堂記念会、大正八年一〇月)には、懷徳堂記念会と同一の目的の下に法人組織の懷徳堂記念会を創設することや、懷徳堂記念会より引き継いだ金六〇〇〇円と有志の寄附金とを財団法人懷徳堂記念会の基本財産とすることが記されている。

(7) 重建懷徳堂設立の経緯については、今井貫一「新懷徳堂建設まで」(『懷徳』第九号、懷徳堂友会、昭和六年一〇月)に詳しい。

(8) 注3の『西村天囚伝』下巻「勅任待遇で宮内省御用掛となる」の「松方内府の懇望で宮内省出仕」による。

(9) 現在の『懷徳』は、一般財団法人懷徳堂記念会が発行しているが、第五〇号までは、懷徳堂友会(重建懷徳堂関係者による親睦切磋を目的として立ち上げられた組織。懷徳堂記念会の後援会的組織)によって刊行されていた。

(10) 天囚の『楚辞』関連資料の多くは、大阪大学附属図書館懷徳堂文庫に収められている。これらは「楚辞百種」と称され、懷徳堂文庫の重要なコレクションの一つとされている。

(11) 『懷徳』第五号(懷徳堂友会、昭和二年二月)に掲載された松山直蔵の教務報告による。なお、寄贈点数・冊数は、竹腰礼子「大阪大学懷徳堂文庫のなりた

ちと蒐集の経緯」(『懷徳』第七〇号、平成一四年三月)によると、約二、九〇〇点一八、六〇〇冊とされる。

(12) 注11に挙げた『懷徳』第五号の松山直蔵の教務報告による。なお、「故西村博士記念会」については、「西村天囚関係資料調査報告―種子島西村家訪問記」(『懷徳』第八六号、懷徳堂記念会、平成三〇年一月)にある竹田氏の報告書に詳しい。

(13) 平成二九年一月二六日の読売新聞夕刊「明治く大正期論客の漢学者」や同年一二月一二日の朝日新聞夕刊「記者で漢学者 種子島に資料二〇〇〇点」など。

(14) この時の調査報告が、湯浅邦弘・竹田健二・佐伯薫「西村天囚関係資料調査報告―種子島西村家訪問記」(『懷徳』第八六号、懷徳堂記念会、平成三〇年一月)にまとめられている。

(15) 二種の目録は以下の通り。竹田健二・湯浅邦弘・池田光子「西村家所蔵西村天囚関係資料暫定目録(遺著・書画類等)」(『懷徳堂研究』第一二二号、大阪大学大学院文学研究科・文学部 懷徳堂研究センター、令和三年二月)、竹田健二「西村家所蔵西村天囚関係資料暫定目録(遺著・書画類等) 補訂(拓本類)」(『懷徳堂研究』第一三三号、令和四年二月)。

(16) 竹田健二「碩園先生著述目録」と現存資料について(『懷徳堂研究』第一二二号、大阪大学大学院文学研究科・文学部 懷徳堂研究センター、令和三年二月)。竹田は、種子島西村家に伝存している資料を何故故西村博士記念会が購入しなかったのか、何故「全て」が重建懷徳堂に寄贈されたのかについては不明としつつも、現在の種子島に伝わる天囚の資料は、西村家が一度も手放すことなく保管していた天囚旧蔵資料であり、天囚の漢学の全容を解明するための貴重資料群であると指摘している。

(17) 湯浅邦弘『世界は縮まれり 西村天囚『欧米遊覧記』を読む』(KADOKAWA、令和四年二月)や竹田健二「西村天囚の懷徳堂研究と『拙古先生筆記』」(『懷徳堂研

究』第一三号、大阪大学大学院文学研究科・文学部 懷徳堂研究センター、令和四年二月）等。

(18) 桐岳寺では、瀧川家累代の墓と五輪の塔とが手厚く管理されている。

(19) 第五代・二八代の内閣総理大臣。若槻は早生まれのため、資言と同期である。この頃は旧姓の奥村を名乗っていた（奥村礼）。「首位を競った」と言う記述は、資言の嗣子瀧川亮による（「父、瀧川亀太郎」、『二高尚志』二二―四、二高尚志社、昭和三十一年七月）。なお、資言は和漢学を修める第一科（三年課程）、礼次郎は英学専攻の第二科（四年課程）である。

(20) 「この年九月の開校式に彼が生徒総代として述べた祝辞は、まれに見る名文といわれている。」（山岡栄市「瀧川亀太郎」、『明治百年島根の百傑』、島根県教育委員会、昭和四三年一〇月）。この記述の「九月の開校式に〔中略〕述べた」には注意が必要である。資言の入学年である明治一二年は、九月から新校舎が用いられるはずであった。しかし、コレラの流行によって一〇日ほど延期となり、それに伴って開校式（新築落成式）と開業式（始業式）も先送りされ、最終的に開校式は一一月下旬に、開業式は行われなかった。また、開校式の記録によると、開校式の祝辞を朗読したのは資言たち新入生ではなく、各科の三年生であった。水澤利忠「瀧川亀太郎著『史記会註考証』（その七）」、『月刊国語教育』第七卷第七号、東京法令出版、昭和六二年九月）には、その事を指摘した池橋達雄の指摘を記載しており、おそらく資言が朗読しなかった可能性は高いと思われる。

(21) 水澤利忠「瀧川亀太郎著『史記会註考証』（その六）」、『月刊国語教育』第七卷第六号、東京法令出版、昭和六二年八月）による。祝辞は次の通り（合字は開いて表記）。

明治己卯ノ夏中学校成ル 茲ニ良日ヲトシ開業ノ式ヲ設ケラル 生不肖ナレドモ諸生ノ後ニ列スルヲ得歎喜限リナシ 乃チ聊蕪文ヲ綴リ以テ祝辞ヲ述フ

伏シ惟フ玉天質美ナレドモ之ヲ琢カサル瓦石ト何ニ扱ハン人モ亦然リ天ノ性ヲ授クル億兆何ニ異ナランヤ 然ルニ其賢愚ノ分ル所以唯学フト学ハサルトニ在ルノミ 然ラハ則チ学盛ニセサル可カラサルナリ 県官夙ニ茲ニ見アリ乃チ中学校ヲ設ケ以テ小学ヲ卒フル者ヲ薫陶セシム 然ルニ校大ナラス生徒モ多カラス 此ニ於テ則テ新築ノ挙アリ以テ有志ノ者ニ入ルヲ得セシム 嗚呼県官ノ下民ヲ恵スル豈ニ之ヨリ大ナル者アラシヤ 入校ノ諸生之ヨリ孜々勉々怠ラス琢磨研究シテ倦マサレバ則チ将ニ欧米ノ盛ニ愧チサラントス是ヲ以テ觀ル新築ノ挙啻ニ管下人民ノ幸ナルノミナラス亦天下万民ノ幸ナリ伏シテ願クハ此校ノ盛日月ト共ニ永ク天地ト共ニ久カラントヲ

明治十二年九月十一日

本校生徒 瀧川亀太郎

(22) 資言の詩に対する評価として、次のものがある。「亀太郎は詩を好まず、よく文を書き、知人から碑文を頼まれると、昼夜を分かつた筆を走らせた。」（注20山岡栄市「瀧川亀太郎」）。「文章家をもって自他ともに任じた君山も、詩は苦手であったものか全く作らなかつた。私の管見に入つたものは僅か両三篇のみにすぎない。」（水澤利忠「瀧川亀太郎著『史記会註考証』（その八）」、『月刊国語教育』第七卷第八号、東京法令出版、昭和六二年一〇月）。なお、息子の瀧川亮も注19に挙げた「父、瀧川亀太郎」の中で、「父は詩を好まず、よく文を書いた」と述べている。

(23) 水澤利忠「瀧川亀太郎著『史記会註考証』（その五）」、『月刊国語教育』第七卷第五号、東京法令出版、昭和六二年七月）。

(24) 明治三十九年に資言は長男を亡くしている。

(25) 経歴は、「瀧川亀太郎博士年譜」（水澤利忠『史記会註考証候補』巻九、史記会註考証候補刊行会、昭和四五年一〇月）を参考にした。なお、注19に挙げた瀧川亮「父、瀧川亀太郎」によると、昭和二〇年の疎開は、資言の望むところで

は無かったと言う。

- (26) 顕彰碑「瀧川君山先生故居碑」の全文は次のとおり。句読点については、水澤利忠「瀧川亀太郎『史記会註考証』(その九)」(『月刊国語教育』第七卷第九号、昭和六年一月)に拠った。

有一代之書、有百代之書、有一邦之書、有万邦之書。司馬子長繼春秋作史記。揆乱世反之正述往事思來者、來者習之不獨禹封朝鮮而東首推我邦大宛而西歐美近或習之而凡習之者、莫不津逮於瀧川君山先生史記會註考証焉。蓋子長之書發憤而作辭或隱約晋唐之間為之注者僅伝三家。降及近代徳川与清學者以考掘名家亦鮮、及之先生乃以二十年功歴験衆説網羅、日本如百川之吸於海群峰之小於岱千年疑滯發揮殆尽宜乎。東京始刻之後海外通有伝印之本衣被之広我邦儒者之業、罕見其匹非先生之好學深思、心知其意而雄於文孰能如此哉。先生諱資言称亀太郎、松江人。此塩見暇宅幼庭訓於此中年教授仙台懸車之後歸於此而成其書晚就養東京、天降喪乱復歸於此而終焉。今距捐館適三十年、郷人景慕立石紀之哲人之所逍遙帷席儼然庶与先生之書共不朽焉。

- (27) 全文は次のとおり。
昭和五十年歳在乙卯後学吉川幸次郎謹撰 小川環樹謹書

大正二年、予得史記正義遺佚於東北大学、始有纂述之志。編摩多年。仙台齋藤報恩会、捐財以充資料採訪之費。久保得二君校古鈔於秘閣、藤塚鄰君購新刊於燕京以贈、服部宇之吉・市村瓊次郎二郎君、謀之東方文化学院、刷印行世。校讐之勞、前則安部吉雄君、後則勝又憲治郎君当之。諸君子之誼、不可誼也。昭和九年孟春 君山瀧川資言識。時年七十。

- (28) 鈎括弧内は、注19に挙げた瀧川亮「父、瀧川亀太郎」からの引用。
(29) 注20に挙げた山岡栄市「瀧川亀太郎」による。
(30) 水澤利忠「『史記会註考証』の著者、瀧川亀太郎先生を偲ぶ」(『図書』第三〇六号、岩波書店、昭和五〇年二月)。

- (31) 但し、湯浅邦弘「西洋近代文明と向き合った漢学者―西村天囚の「世界一周会」参加―」(『大阪大学大学院文学研究科紀要』第六〇巻、大阪大学大学院文学研究科、令和二年三月)は、天囚の『欧米遊覧記』を用い、そこに見える漢学者としての天囚の姿勢を「中国古典を尊重しつつも、西洋近代文明に謙虚に接し、その良い点は高く評価し、また日本の良さも再発見している。」と述べており、世界一周以降は柔軟な態度であったことが窺える。

- (32) 大正四年八月の文。『碩園文集』巻三(懷徳堂記念会、昭和十一年一〇月)収載。古典講習科を設置した当時の東京大学総理であった加藤弘之の傘寿の祝いで古典講習科の同窓生が一堂に会した折の文章。

- (33) 景社とは、天囚が設けた漢詩文鍛錬を目的とする結社。明治四四年に発足。毎月二五日に漢詩文を持ち寄り、互いに添削し合っていた。会の名前の由来は、メンバーが全員が大阪市北区の天満宮付近に住み、祭日(二五日)に会合することに因むという。メンバーは狩野直喜や長尾雨山、内藤湖南、石浜純太郎、神田喜一郎、武内義雄と錚々たるものである。なお、西村家資料の中から景社に関する新資料が発見され、湯浅邦弘「西村天囚の知のネットワーク―種子島西村家所蔵資料を中心として―」(『懷徳』第八七号、懷徳堂記念会、平成三一年一月)に紹介されている。

- (34) 「誠之者、択善而固執之者也。」(『中庸』第二〇章)

- (35) 素焼きの缶。缶は口の部分が小さく、腹の部分が大きなかめ。

- (36) 「心之所同然者、何也。謂理也、義也。聖人先得我心之所同然耳。故理義之悦我心、猶芻豢之悦我口。」(『孟子』告子上)

- (37) 「孟子曰、鶏鳴而起、孳孳為善者、舜之徒也。」(『孟子』尽心上)

- (38) 「浩生不害問曰、樂正子何人也、孟子曰、善人也、何謂善、曰、可欲之謂善、有諸己之謂信、充實之謂美、充實而有光輝之謂大、大而化之之謂聖、聖而不可知之謂神、樂正子二之中、四之下也。」(『孟子』尽心下)

(39) 初稿では「高橋柳溪」、『斯文』掲載稿では「高橋柳涯」となっているが、現時点では両名とも未詳。架空の人物である可能性もあるが、今後も継続して調査したい。

(40) 「雕琢復朴。」(『莊子』 応帝王篇)

(41) 「凡文字、少章時須令氣象崢嶸、彩色絢爛、漸老漸熟、乃造平淡、絢爛之極也。」

(蘇軾「与二郎侄書」)

(42) 水澤利忠「瀧川龜太郎著『史記会註考証』(その三)」(『月刊国語教育』第七卷 第三号、東京法令出版、昭和六二年五月)。

(43) 資言以外の作品は以下の通り。日下寛「中村伯実文集序」、佐倉孫三「紀漆崎大尉従卒為市事」、安井小太郎「書王父手録尚書後案後」、久保得二「詩十教首」。

日下には天囚と資言の評が付されている。

(44) 本文でも触れているが、天囚は斯文会設立時より常議員を務めている。

(45) 『斯文』第一編第一号の彙報欄に記載の内容は次の通り。「以文会は詩文の振作を以て目的となし、明治三十四年の頃の創立にかゝり、綿々今に至りて絶えず。毎月土曜日を会日と定め、順次会員の自宅にて開会す。毎回課題を定めず各自新得の詩文を持ち寄り廻覧批評をなす。会員は八九名に限られ、地方会員は限外なれども二人あるのみ。」この後には設立時からの会員が列記されており(物故者・退会者も含む)、安井・牧野・日下・資言の名が確認できる。なお、資言は「地方会員」に分類されている。毎週土曜に開催されていた会に直接出席はできなかったであろうが、天囚に「拙善居記」の初稿を送付したように、郵送などの手段によって参加していたのであろう。

(46) 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第六七輯、早稲田大学大学院文学研究科、令和四年三月。

(47) 池澤は、『緑筠軒詩鈔』巻八『猗々処吟稿』二の後序にある資言の「書題画六言三十韻後」を論拠として挙げている。

(48) 講演内容は、注22に挙げた水澤利忠「瀧川龜太郎著『史記会註考証』(その八)」に記載のものによる。

(49) 注22に挙げた水澤利忠「瀧川龜太郎著『史記会註考証』(その八)」参照。

(50) 「教科書検定に携わった漢学者―瀧川龜太郎と長尾雨山」(江藤茂博・加藤国安編『漢学と教育』(講座近代日本と漢学第五卷) 第三部第三章、戎光祥出版、令和二年三月)。

(51) この書簡は、二松学舎大学文学部の歴史文化学科解説を記念して開催した記念展示会(二松学舎大学大学資料展示室の企画展「歴史文化学科 開設記念展示 黎明期の歴史学―東洋史学者 石村瓚次郎資料から」(会期二〇二二年三月一四日～五月一四日))の解説書である『黎明期の歴史学―東洋史学者 市村瓚次郎資料から』(二松学舎大学附属図書館、令和四年三月)に「32 西村時彦書簡(一九一八年(大正七)三月六日、市村宛206)」として収載されている。

(52) 髭の話については、「初年と晩年」に挙げられた大正六年二月二十九日の書簡の中にも見られる。「吾兄(筆者注:資言を指す)美鬚髯、風貌有威、然白又添白、人視以為老翁、而又以老翁自居、弟(筆者注:天囚を指す)為猷一策、不若勇去、以与年俱新其風貌、是化老為少之法也、少者往往欲風貌似老人、老人宜伍壯者以忘其老、則剪去白髯可也。不知高明以為何如。」

(53) 注51に挙げた『黎明期の歴史学―東洋史学者 市村瓚次郎資料から』の「3 古典講習科在学中の市村瓚次郎の詩文稿」参照。

(54) 「□」は印記を表す。

(55) 「竇燕山、有義方、教五子、名俱揚。」(『三字經』)。また、『左伝』隱公三年の石碯が莊公諫めた時の言葉「臣(筆者注:石碯)聞、愛子教之以義方、弗納於邪。」もある。

(56) 欧陽脩の母鄭氏は、夫を早くに亡くしたが欧陽脩を立派に育て上げた。そのことを受け、「欧母」は「賢母」の意味で用いられている。なお、天囚の父城之助

が亡くなったのは、天囚二歳の時である（城之助二七歳）。

【附記】

本研究は、文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）」による「二〇二二年度 松江高専女性研究者育成支援事業」の助成を受けた成果の一つである。

池田 光子（いけだ・みつこ）

松江工業高等専門学校校准教授。専門は懷徳堂、日本漢学（近世〜近代初期）、中国哲学。共著に『中国思想基本用語集』（湯浅邦弘編著、ミネルヴァ書房、二〇二〇年三月）、主要論文に「種子島西村家所蔵西村天囚関係資料の整理状況と特徴とについて」（『懷徳』第八七号、二〇一九年一月）、「第二次新田文庫について」（『懷徳堂研究』第一二二号、二〇二二年二月）など。